

# ヘンデル



## 音楽に興味を持った少年とそれに猛反対する父

1685年、ブランデンブルグ＝プロイセン領・ハレの町に生まれたヘンデルは、幼少の頃から楽器の演奏に興味を持ち演奏家を志します。一方ヘンデルの父親は社会的地位が低く収入が不安定な音楽家となることに反発し、法律家として育てるため自宅にあった楽器を取り上げるなどヘンデルを音楽から遠ざけようとした。

そんな「音楽禁止令」が解かれたのは、周囲の人がヘンデルの音楽の才能を評価していたからでした。宮廷仕えである父の上司、公爵もその一人でした。父親の仕事についていったヘンデルが公爵の屋敷にある礼拝堂でオルガン演奏を披露し、その演奏振りに感心した公爵が音楽家に反対していた父を説得したといわれています。以降ヘンデルは父親に口を挟まれることなく、堂々と音楽についての勉強に励むことができました。

## イタリア そしてイギリスへ作曲家としての才能が開花

19歳(1704年)になったヘンデルはこの頃ハンブルグへ移り劇場のオーケストラに加入し、チェンバロを担当すると同時にオペラ楽曲の作曲に取り組んでいたといわれています。その後21歳(1706年)から4年間、当時のバロック音楽の中心といわれたイタリアへと留学します。現地のイタリア人の作曲家

- 1685年 (0歳) ● ドイツ・ハレに生まれる。
- 1704年 (19歳) ハンブルグのオーケストラに参加。
- 1706年 (21歳) イタリア留学。オペラ作品で名が知られるようになる。
- 1710年 (25歳) ドイツ・ハノーヴァー選帝侯の宮廷楽長に就任。
- 1712年 (27歳) ロンドンへ移る。
- 1714年 (29歳) ハノーヴァー選帝侯がイギリス王ジョージ1世として即位。
- 1727年 (42歳) イギリスに正式に帰化。ジョージ1世が亡くなり、息子がジョージ2世として即位。**『ジョージ2世の戴冠式アンセム』作曲。**
- この頃から、オラトリオの作曲家として活躍。
- 1741年 (56歳) 『メサイア』作曲。
- 1753年 (68歳) 失明。
- 1759年 (74歳) ● 逝去。

との仕事を重ねながら音楽技法を学びつつ、数多くのイタリアオペラ作品を書き上げました。これらの作品が高い評価を得てヘンデルの名前はヨーロッパに一躍広がり、その能力が買われて25歳(1710年)の時にはドイツのハノーヴァー選帝侯の宮廷楽長へ任ぜられました(宮廷楽長は当時の音楽家における最高位職)。ただし、ハノーヴァーでの音楽活動はほとんどせず、任命後しばらくしてイタリアオペラが流行していたイギリスに移り作曲活動に取り組みました。

## イギリスに帰化 初仕事としての『戴冠式アンセム』

イギリスに移住して作曲したオペラが成功を取めたことによりイギリス王室とのつながりが生まれ、以降ヘンデルはイギリス王室のための楽曲を制作していきます。29歳(1714年)の時には数奇なことにかつて宮廷楽長として仕えていたハノーヴァー選帝侯が新たなイギリス国王に招かれ、ジョージ1世と名乗りました。ジョージ1世就任後も楽曲提供は続き、1717年には国王主催の船上コンサートで『水上の音楽』が披露されました。1727年にイギリス王室から帰化認定証が下りヘンデルがイギリス国籍を認められた矢先にジョージ1世が崩御し、息子であるウェルズ皇太子がジョージ2世として王位を継承しました。このジョージ2世の戴冠式(王位継承のための式典)で披露されたのが『ジョージ2世の戴冠式アンセム』です。ヘンデルが42歳の時の作品でした。

## オペラからオラトリオへ 代表曲『メサイア』の誕生

オペラで名の知れたヘンデルですが、次第にロンドンでのイタリアオペラ人気も下火になります。そこで声楽曲・劇場音楽を得意としていたヘンデルは、40歳(1720年代以降)を過ぎたあたりからオペラに代わって「オラトリオ」と呼ばれる演目の作曲を中心に手掛けるようになります。オラトリオとは、簡単に言うとオペラから演出や演技を取り除いたものでストーリー性のある楽曲を合唱メインに歌う形式のことです。「ハレルヤ・コーラス」で有名な『メサイア』もその1つであり、56歳(1741年)の時に完成させました。オラトリオのドラマティックな曲調は人々の心をつかみ、ヘンデルは再びロンドンでの人気を得ることとなりました。

その後68歳(1753年)の時に両目を失明し、以降作曲活動は行わずオルガン等の演奏のみを行っていましたが、1759年、74歳で亡くなりました。ヘンデルの遺体はウェストミンスター寺院に埋葬され、参列者は3,000人を超えたといわれています。ウェストミンスター寺院はイギリス王室の戴冠式の式場でもあり同時に歴代の王族や数多くの著名人が埋葬されており、ヘンデルの功績がイギリスから認められていた証しといえるでしょう。